宮城県石巻市北上町釣石神社再建奉祝祭　「鎮魂能舞　北上」2016年6月19日奉納

第一楽章　北上　（ゆったりと　法螺貝　石笛　神鈴　奉奏）

神ながらたまちはへませ　神ながら　神ながらたまちはへませ　神ながら

（歌）　北上遥けく　滔滔と流る

海幸山幸　はじけるいのち

友と語らい　明日を夢見

今日の喜びを　常永久に

（語り）平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖から真っ黒な壁のような高浪が一挙に北上川に押し寄せ、みるみるうちに、家々を、田畑を、山野を呑み込んでいった。避難指示を待って校庭に待機していた対岸の大川小学校の大勢の児童たちも呑み込まれていった。

　　　赤い靴履いてた　女の子　異人さんに連れられていっちゃった

　　　横浜の港から　御舟に乗って　異人さんに連れられていっちゃった

逆らうことのできない自然の振る舞いではあり、まさに自然とは、そのような自然の律動に従って動き、はたらき、現象するものではあるとはいえ、人間世界の暮らしに多大な被害と悲惨と痛みをもたらすことも歴史の事実であった。

1150年前、貞観11年5月26日、三陸沖で大地震が起こった。時の歴史書『日本三代実録』には、「流光真昼のように照らし、人々は叫び声を上げ倒れ伏して起き上がることできず。家の下敷きになって圧死する者、割れた地面に埋もれる者続出。驚愕した牛馬奔走、城郭倉庫門壁、倒壊建築の数知れず。海、雷如く吠え、盛り上がった高波城下に押し寄せ数十里陸を呑み込み、船に乗る間も山に逃れる間なし。ゆえ、溺死者千人を下らす。家財も稲苗も何も残らぬ大災害なり」と記されている。

その貞観大地震に比する大地震が平成23年3月11日午後に起こったのだ。

嗚呼　無情なり　嗚呼　無常なり

この貞観大地震発生時の天皇は清和天皇、政務は、摂政太政大臣藤原良房が司っていた。本釣石神社の御祭神天児屋根命は、長く日本の政務を担当してきた摂関家の藤原氏・中臣氏の祖先神である。そして、天児屋根命の本地は地蔵菩薩と信仰された。

神ながらたまちはへませ　助けたまえ　南無阿弥陀仏　救いたまえ

平成28年6月19日、東日本大震災から5年と3ヶ月、氏子崇敬者、また岐阜県南宮大社などの支援を受けて、石巻市北上町追浜に鎮座する釣石神社の新社殿が竣工なり、かくも盛大に奉祝行事が営まれることになった。

その復興・再建を祈り祝う、奉祝のみ祭に際し、ここに、京都市在住の観世流能楽師・河村博重と不肖・鎌田東二が共に心を込め、魂を込めて、「鎮魂能舞　北上」を奉納申しあげるものである。

神ながら　たまちはへませ　神ながら　神ながら　たまちはへませ　神ながら

北上遥けく　滔滔と流る

この麗しき　山河海

心尽して　みたまを悼み

亡くしたいのちを　忘るまじ

第二楽章　夢にまで見た君ゆえに　（静かに　横笛奉奏）

夢にまで見た君ゆえに　ひとつかみまでさくゆえに

祈りを込めて届けたい　心尽きるまで果たしたい

仰ぎ見る空と

夢の果てまで君探し　この世の果てまで君恋し

届かぬ思いを見届けて　いのち尽きても届けなむ

落ちて往く空へ

　　一日過ぎたら戻れない　時の流れに身をまかせ

　　この世の果てまで追いかけて　星のかけらとなりにけり

夢の奥まで迷い来ぬ　風に吹かれてさ迷いぬ

どこまで行けども果てしない　祈りの果てまで身を投げて

飛び惑う夢よ

夢にまで見た君ゆえに　ひとつかみまでさくゆえに

祈りを込めて届けたい　心尽きるまで果たしたい

仰ぎ見る空に

第三楽章　神　（激しく　石笛奉奏）

この苦しみの中に神が在る　この悲しみの中に神が居る
神は森に住んでいるけれど　人の心の森にも住んでいる

この激しさの中に神が在る　この慎みの中に神が居る
神は海に住んでいるけれど　人の心の海にも住んでいる

開け天地　吹けよ山河　つながれ天地　結ばれよ山河

この痛みの中に神が在る　この静けさの中に神が居る
神は天に住んでいるけれど　人の心の天にも住んでいる

この喜びの中に神が在る　この祭りの中に神が居る
神は祭りの中に現われるけれど　祈る心の中にも現われる

開け天地　吹けよ山河　つながれ天地　結ばれよ山河

第四楽章　弁才天讃歌

オンソラソバテイエイソワカ（8回）

天の川清く流れ　地上に光の帯となって　緑の大地を育み
世界に夢の帯となって　心の絆を結ぶ
弁才天　輝け　弁才天　世界へ　弁才天　響かせ　弁才天　天翔ける

オンソラソバテイエイソワカ（8回）
天の星遠く流れ　地上に光の帯となって　魂の道を照らし
世界に虹の橋となって　国の境を超える
弁才天　あふれ出せ　弁才天　宇宙へ　弁才天　響かせ　弁才天　魂翔ける
オンソラソバテイエイソワカ（8回）
オーム

神ながらたまちはへませ　神ながら　神ながらたまちはへませ　神ながら

（アカペラで　ゆっくりしずかに）

北上遥けく　滔滔と流る

この麗しき　山河海

心尽して　みたまを悼み

亡くしたいのちを　忘るまじ

（ゆったりと　法螺貝奉奏）